

被曝した父（松坂義正）を背負って被曝直後の広島市街の救護所の向かった医大生（松坂義孝）は現在（1965年？）皮膚科の医師として広島で開業しており、彼が（出版に先立って雑誌にエッセイを書いていた）筆者（大江健三郎）に書いて寄こした手紙；

「大江氏のいう『被曝した医師は、被曝者の後遺症に直面して絶望的にならざるを得ぬ医師は、また、みずからの運命を直視してそうならざるを得ず、したがって、しばしば、原爆症はなくなったかといった楽天的な報告をおこないそのあとで、にがい訂正をくりかえしたはずであった』しかし、わたくしは、爆心地より1キロにありながら、いささかの後遺症はあったが、現在、まず健康であり、父母も、同じく被曝した当時の女学校二年生の妻、また昭和30年代に生まれた3人の子供も、全て健康であるところから、できるだけ後遺症の発現のないことで楽天的であろうとした。そのためであろうか、原爆の文学とよばれるものが、ほとんど、回復不能な悲惨なひとたちの物語であり、後遺症の症状、心理の描写であるより他に、ありようがないのかを以前から訝っていた。たとえば、被曝して、ひととおりの悲惨な目にあつた家族が、健康を回復し、人間として再生できたという物語はないものだろうか。被曝者はすべて原爆の後遺症で、悲劇的な死をとげねばならぬものであろうか。被曝者が死ぬとき、さきにいった健康と心理的な被曝者の負い目とか、劣等感といったものを克服して、普通の人間の死、自然死をとげることはゆるされないのかを考えた。わたくしたちが死ねば、すべて原爆後遺症の招来した悲惨な死であり、それは原爆への呪いをこめた、原爆反対に役立つ資料としての死であるとしか考えられないのだろうか。たしかにわたしたちの生は、原爆に被災したために大いにまげられ、苦しめられたことは否定できない。しかし、これは、原爆でなくとも、戦争を経過したひとたちは、程度の差はあれ、なめていることであろう。わたくしは、とくに広島に被曝者のみの、被曝者意識という、なにか甘えた感情があつてはならないとみずからに戒めた。みずからに治癒をはかり、みずから人間を回復して、原爆をうけながら、それにもかかわらず、うけない人間とおなじく、原爆によらない死をわがものにしたいねがいをもつようになった。

被曝19年、93歳で亡くなったわたくしの祖母は、その生涯は幸福とは言えない変転をへたが、健康に終始し、まず原爆後遺症ではなさそうな、自然死をとげた。そういう、被曝者の、原爆の影響を脱した自然死も往々にはあるということを考えてほしい。被曝者の死は、ちょうど、8月6日の広島市がやたらと政治的な発言にみちみちて、しづかな喪であるべきもその日が余所者の支配となりかねないように、他所の政治的発言のために資料のためにだけあるようには考えないでほしいと思う。--- 後遺症もなく、原爆反対の資料とされるよりも切実に、みずからの普通の人間にかえりたく思っている楽天的な、被曝者もいること忘れずにあつてほしい」